



ミャンマーのクーデターから3年 —タイ国境のミャンマー難民は、今—

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

●公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 理事

タイ国境の街、メーソトの混沌

タイ北西部のターク県メーソトはタイ・ミャンマー国境の街。熱帯のタイ国境の3月末は、雨が降らない乾季の真っただ中。日中の気温は体温を超える40度近い炎暑の季節。焼付く太陽の下で顔や腕の皮膚は外の空気に触れると火傷するようだ。

国境を流れるのはムーイ川。その国境には第一友好橋が架かる。対岸はミャンマーの国境の街、ミャワディ。ベトナムからミャンマーを結ぶ国際物流道路「東西回廊」であり人とモノの最大の要衝地だ。少なくとも300万人ともいわれるミャンマーからの移民労働者の最大の玄関口でもある。

日本ではあまり報道されていないが、第一友好橋のミャンマー側の上流や下流にある少数民族が支配する地域には、中国資本とされるカジノや娯楽型ホテルが立ち並びブチャイナタウンが建設されている。詐欺、違法オンラインカジノ、人身売買等が行われていると国際的な問題になっている。

国境の街周辺にはミャンマーでのクーデター後に軍の弾圧を逃れて多くの市民が逃れてきている。タイ政府は公式には避難民の受け入れを認めておらず、多くの人々がジャングルの中での生活を強いられ、衣食住医が不足している。

最大のメラ難民キャンプ

メーソトの街から車で北へ約1時間、銃を持ったタイ軍の兵士が警備する検問所を2カ所超えて

向かった先にメラ難民キャンプがある。タイ・ミャンマー国境にあるミャンマー難民キャンプ9カ所のなかで最大のキャンプである。難民キャンプの入り口には、英語で「メラ避難民一時収容地域」と表示してある。「難民」と表示していないのは、タイ政府が難民条約に批准していないためだ。

難民キャンプの入口ゲートで車から降りて、訪問者記録簿に名前と所属団体名を書いてサインをする。国内外の報道機関関係者の取材や訪問は原則として許可されていない。

タイ政府は公式には「一時的避難民収容センター」としているが、事実上は「難民」として認めている。国連機関のUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）や国際NGOがタイ政府内務省の監督のもと、キャンプ運営、食糧配布、医療、教育、保護、生活向上などの分野を支援している。難民キャンプ9カ所全体の人口は約91,000人（2023年12月国連難民高等弁務官事務所）で、その約8割をカレン民族が占めている。

メラ難民キャンプにある難民による自治組織「難民キャンプ委員会」の代表ら5人のメンバーからキャンプの最新の概要を聞いた。キャンプリーダーの話では、メラ難民キャンプは3地域に区分されていて、5,672家族、31,992人が暮らす。半数以上がカレン族で、ビルマ族、モン族、その他と続く。宗教は、仏教が最も多く、キリスト教、

イスラム教等がある。難民のなかで難民登録が行われているのは12,556人、未登録が18,456人。難民登録がされていなければ第三国定住の資格がない。

筆者の所属するシャンティ国際ボランティア会は、タイ政府から正式の許可を得た日本で唯一の国際NGOとして、20年来、国境にある7カ所の難民キャンプで図書館を中心とした教育・文化支援活動を続けてきた。

「祖国は難民キャンプ」の苦悩

タイ国内に難民キャンプが設立されたのは1984年。40年が経過して、親世代や祖父母世代と子どもたちとの世代間の価値観のギャップも大きくなっている。15歳以下の子供たちの大半は「祖国は難民キャンプ」世代である。生まれてから一度も祖国はもちろん、難民キャンプの外にも出たことがない。ミャンマーの農村では一般的な稲作や水牛や牛も見たことがない。

難民キャンプでは恒久的な建物の建設が禁止されているため、民家は、屋根はチークの葉を重ねて編み、柱はユーカリの木、壁は竹を編んで作られている。高床式の作りの簡素な家が急な斜面にまで隙間なくびっしりと立ち並ぶ。学校などの公共の大型の建物はトタン板でできている。

難民問題の解決方法とは

現在、「難民問題の恒久的な解決」として考えられているのは以下の3つである。

本国帰還：最も恒久的な解決方法の一つだったが、キャンプ委員会のメンバーは、難民の約8割は祖国への帰還を希望していないと口を揃える。クーデター以降は、絶望的な状態となってしまった。難民キャンプ生まれの世代が半分を超え、祖国に親戚など頼れる人もいない、土地も仕事もない。軍の攻撃など安全も保障されていないので帰還が実施できる状況にはない。

第三国定住：教育の機会やより良い生活を求め、第三国定住はアメリカを中心に大人気だ。クーデター前に最大の定住受入れ国だったアメ

リカは一度は中止をしたが、2023年にミャンマーでのクーデターを契機に再開を表明。絶望的な状態にある難民キャンプの若い世代を中心に大きな希望となっている。

タイへの統合：難民の中で最も希望が多いのはタイへの定住である。隣国であり、気候、宗教、文化・社会などの共通性が高く暮らしやすい。しかし難民キャンプの恒久化につながりかねないために、タイ政府として認めることは極めて難しい状況だ。

混迷の中に希望はあるのか

私たちに今、出来ることは、難民キャンプが過酷な環境であるからこそ、国境やタイ国内の移民労働者の子どもたちへの教育支援活動を途絶えさせない事だ。支援活動を止めてしまえば活動が途絶える。外国の国際NGOは活動の再開が極めて困難な状況にある。現地スタッフも命がけで日本人スタッフと共に「教育の機会」を創るために関わっている。

クーデター後にタイへ逃れてきた人々も、暴力や貧困、差別などを逃れてきた先でまた貧困に陥るという負の連鎖が起きている。国境を超えた貧困の再生産を断ち切るためには教育の機会を途絶えさせないことが大切だ。

少数民族であっても自らの言語やミャンマー語を学び、自らの文化的アイデンティティを継承して欲しい。子どもたちの笑顔こそが困難な難民キャンプで生きる大人たちの生きる糧となることを40年前のカンボジア難民キャンプから学んだ。



メラ難民キャンプの小学校の教室で学ぶ子どもたち